

2008.6.13

満州国建国に至った遠因について

青木 満男

スマイル会 6 月例会で中村嘉孝氏から 5 月に旅行した中国東北地区(旧満州)の現状や日露戦争や満州国の残滓についての感想報告があった。満州国建国に至った事情については、軍部の独走、横暴によるとの見解もあるが満州に生まれ育った者として私なりにその遠因と他の選択肢は無かったのかについて考察した。

二大遠因は明治維新と日露戦争の勝利

明治維新

開国と欧米の先進技術を取り入れた文明開化は良かったが、それにより日本はアジアで一番進んだ国になり、日本民族のみが図抜けて優秀と思い込み他のアジア諸国を見下すようになった。

(アジア諸国に仲間意識が無いのは敗戦後も払拭されたとは思えない。戦後 60 年経過しても中国、韓国と真の友好は成立していない。アジアで友好的な国はタイ、台湾のみである。独仏が非常に上手く行っているのと極めて対照的である)

又欧米から文化、技術を学ぶだけでなく、狭い国土から欧米の植民地支配を羨望する気持ちも多分に育った。遅れて帝国主義、植民地主義のバスに乗ろうとした。

特に当時の中国、朝鮮の状況を見てその思いを深めたと考える。

明治維新のもう一つの影響は「神」を引っ張り出してきた事である。

神の国日本(今でもそれを言う政治家がいる)、現人神、皇国、皇道、八紘一宇ときて、これがますます他のアジア諸国より偉いのだとの感覚を国民に植え付けることになった。

日露戦争の勝利

日露戦争の勝利がそのまま国民に受け取られた。

実情は日本は資金も、弾薬もつきかけていたのが、ロシアが内政事情で戦争

継続を欲しなかったのに救われたのである。

国民は勝利をそのまま受け取った。

外交交渉もあり全ての情報公開は難しいが「依らしむべし 知らずべからず」では国民は正しい判断はできない。

軍部もその勝利により慢心し、統帥権を振りかざし、政治家を下に見、軍国主義へ突っ走った。

軍縮のワシントン条約で主力艦の比率を米、英、日を5 : 5 : 3としたことで不満を持った国民も多かったが実の日本は底力は無く、この3の比率さえも背伸びをした数字であった。

他の選択肢はなかったのか

この問題は、50年、100年先を見通す指導者がいなかったことに尽きる。軍部を抑え、正しい方向付けをできる人を得られなかったのが近代日本の不幸であった。

軍事優先よりも教育立国を目指すべきであった。

昭和2年～6年間の総予算に対する軍事費の比率は約35%（平成日本では約6%）と誠に空恐ろしい数字である。

戦艦大和をつくるのではなく、資源の乏しいわが国は技術、科学面で真似ではなく他国をリードする力を養い、先進技術国、貿易立国を目標にしていれば他国、他国民に迷惑を掛けることもなかったのである。

20世紀になって「無主の土地」など有る分けがない。

満州国建国に向かっていた時代は不景気と農村の疲弊で少女の身売りもあった。農民は米を作っても十分に食べることの出来ない環境にあり、満蒙開拓団に応募せざるをえない状況にあった。

しかし現在の米作の発展（寒冷地に強いもの、収穫の多い品種の開発）を見れば、資金や人材をもっと早く投入していれば解決出来ていた問題である。現在のわが国の人口は12,800万人であるが、昭和5年の内地の人口は6,440万人である。

それが現状では米余りで、税金を投入し減反しなければならない。

当時は国の防衛について全く顧慮しなくて良い時代ではなかったが、科学技術を振興し、対艦、対空、対戦車ミサイル等抑止力となる兵器をいち早く開発していれば国の安全は保たれたであろう。

以上